

# 認知症高齢者の意思の「理解」をめぐって

## －パッシング・ケアの意義に関する介護者の意識から－

荒 木 正 平

A study on the “understanding” of intention of elderly people with Dementia

Shohei ARAKI

キーワード：認知症高齢者、理解、語り、物語、パッシング・ケア

### 1. はじめに

本研究の目的は、認知症高齢者の意思を「理解する」という営みの有する意味について、認知症高齢者を介護する者の「語り」の分析を通して明らかにすることである。

認知症高齢者による「語り」とそこに込められる意図（あるいは思い）については、いくつかの先行研究において指摘してきたとおり、物語としての現実の共同構築とは言いながらも実質的には介護者主導で一方的に解釈されるケースが多い<sup>1</sup>。介護者は、「語り」の主体としての認知症高齢者の思いを十分に汲み取ることなく、結果として介護者側の望む現実認識を、認知症高齢者の意思であると（意識的／無意識的に）誤読してしまっているのではないだろうか。認知症高齢者に関わる介護者が、認知症患者の「語り」を恣意的に解釈することで、そこには、「語り」の本来の主体であるはずの患者らが抱いた思いとは異なった意味が付与された「物語」が生産されてはいないか。このような視点からの考察を通して、認知症高齢者ケア場面における「違和感」や「居心地の悪さ」を軽減し、その解消につながる道筋を探りたい<sup>2</sup>。

### 2. 研究方法

作業を進めるにあたっての主たる資料は、2006年から約3年間にわたり認知症対応型共同生活介護（以下、グループホーム）において参与観察を

実施した間に作成したフィールド・ノートと、2006年から現在までに、グループホームの他に軽費老人ホームや特別養護老人ホーム等を含む介護職員または介護経験者を対象に実施した、直接面接（半構造化面接）方式インタビューにより得られたデータである。

### 3. 重要語彙の確認

ここで、本研究におけるキーワードについて説明しておく。

#### ① 「物語」・「語り」について

本研究においては、「物語」という概念を用いている。まずは、その意味するところについて触れておきたい。これについてアンダーソンとゲーリシャンは、

人の行為は社会的な構成作業と対話を通して作り出される現実のなかで営まれる

（アンダーソン&ゲーリシャン [1992=1997: 62]）

人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって自らの経験に意味とまとまりを与え、そうして構成された現実を通して自らの人生を理解し生きる（同上）

と述べている。社会構成主義の考え方では、「現実には他者あるいは社会との共同作業によって作られる」「物語的な現実」とであるとされるのである。また、「(形式や構造としての) 物語」と「(行為としての) 語り」とは相互的でありかつ連続的で、常に可変性に関わったものである(野口 [2002] 参照)。本研究において「物語」という語を用いる際は、このような意味においてである。

## ② 「パッシング・ケア」について

次に、パッシング・ケアについてである。介護現場のコミュニケーション場面で広く用いられるテクニックに、パッシング・ケアと呼ばれるものがある。パッシング・ケアとは、社会学者のゴッフマンによるパッシング (passing) 概念をもとに、同じく社会学者の出口泰靖により構想された用語である。出口によると、それは

「「呆けゆくこと」に気づいている周囲の者が、まるで本人が「呆け」てはいないかのように振る舞う文脈をつくりだす」(出口 [2004 : 166])

ことを前提としたケア手法とされる。認知症高齢者の症状に気づいている周囲の支援者らが、まるで本人が認知症などではないものとしてふるまう関係形成上のテクニックであり、認知症高齢者への「配慮のケア」として用いられることが多い(出口 [2004])。

## 4. 他者を「理解する」という営為をめぐる

以上を踏まえて、本題に入りたい。今日の介護現場をめぐるのは、「介護者が被介護者を十分に理解しえないことこそが問題であり、利用者理解を深めることで、介護現場の快適さを高めること、また利用者にとってはQOLを向上することにつながる」ことを当然視するような言説が多数を占めている。そのように考えること自体は間違いではない。利用者を理解するよう心がけることは、確かにある程度までは重要なことであり、また、介護の質を高める上で効果的でもある。しかし、

認知症状が強く表れ、落ち着かない利用者によって日々接している介護職員の中には、「理解」の意義を認める反面、そこにある種の限界を感じる人も多いのではないだろうか。

社会学者の奥村隆は「理解」について、二つの基準があると言明している。ひとつは「完全な理解」という原理的な基準であり、もうひとつは「適切な理解」という実践的な基準である、という(奥村 [1998 : 246])。介護の現場に限らず、ある人が別のある人について「完全な理解」に達することは、現実的にはありえない。にもかかわらず、介護の現場においては、利用者を理解することの重要性のみが強調されすぎているのではないかと。奥村はさらにこう続ける。

原理的な「完全な理解」を誤って実践的な「適切な理解」とするとき、私たちはいつも「理解の過少」だけを発見し、「理解の過剰」は絶対に発見できないことになる。(奥村 [1998 : 246])

そもそも不可能なはずの「完全な理解」への要求があまりに強くなることは、介護者／被介護者双方の「居心地の悪さ」や、介護者に多いとされる燃え尽き症候群 (バーンアウト) とも無縁ではない。「理解の多寡」については、明確な私たちでは測定困難であり、また職員間の競争意識が徒労感にもつながる。

ここでさらに重要になるのは、介護職員らによる「理解したい」思いを向けられる対象たる認知症高齢者が、「過剰に理解」されることによる居心地の悪さを感じている可能性に、介護職員らが気づいているか、という点である。

また「理解」を過剰に重視する志向性は、介護職員から認知症高齢者へ、あるいは介護職員から家族介護者へ、「理解している(知っている)はず」という期待、「理解がなさすぎる(知らなさすぎる)」「理解すべき」という教化の眼差しとして向けられることも考えられるだろう。そのいずれにおいても、関係する主体相互にとってのストレス要因として機能しうることを指摘しておきたい。

これに関連して、たとえば（資料1）にみられるAの発言には、このような意識が表れている。無論ここでの発言は、それ自体では特に問題があるものではない。指摘された家族に直接向けられたわけでもなく、上記のような「理解の過剰」にともなう居心地の悪さに直結するものではない。しかし、職員間のごく自然なやりとりのなかで頻回にこのような意識が表出されることで、特定の家族に対して「理解の過剰」を強要する集団意識が醸成される危険性が高まることは、ここで指摘しておいてよいだろう。

## 5. パッシング・ケアの有する可能性と困難性

パッシング・ケアの概念をめぐることは、これまでにその一定の有効性を確認されてきている<sup>3</sup>。その場しのぎと言われればその通りであるかもしれないが、認知症高齢者とのかわりにおいて「その場をしのぐ」ことの持つ意味は大きい。日常の何気ないやりとりのなかで、認知症を抱える人々が傷つけない文脈を介護職員が共同で発見し、一旦は落ち着かなくなった「その場」を、なんとか「しのぐ」ことで、思いがけない新たな文脈へと話が展開し、そこから徐々に不穏の訴えが消失することも多い。

参与観察を行うなかで確認された例をあげておく（資料2）。グループホームにおいて「私はぼけてしまった」と帰宅願望の訴えを繰り返され、ときに「死なんといかん」などの発言も聞かれた男性利用者に対し、介護職員が、利用者ご自身の若い頃の思い出話を伺っているときの様子である。何気なく始まったやりとりは、いつしかご本人の記憶に強く残っていると思われる戦時中の体験についてのお話へと展開していった。東南アジアに出征したその方は、戦地で象とふれあい背中に乗ったことや、その愛くるしいしぐさなどについて、表情豊かに表現されていた。お話が一段落するころには、ご本人もすっかり落ち着いた様子で笑顔も見られていた。もちろん、常にそのような文脈が生成されるとは限らないが、パッシング・ケアが一定の有効性をもつことは、それ以外にも多くの場面で確認された。

パッシング・ケアの使用について、臨床哲学者の西川勝は、「認知症ケアにおいて重要なのは（略）認知症が問題となる場から、すり抜けること」であるとして肯定的に評価する（西川[2007:113]）。

しかし同時に、このケア手法の濫用あるいはルーティン化は、認知症高齢者の「語り」の意味の多様性を縮減する装置として作用しうる。例えば先の男性利用者の例にしても、介護者側が、「このような話題を持ち出すことで帰宅願望の訴えが落ち着く」という結果だけを求めて、その話題をルーティンとしてしまうことで、本人がそもそも訴えたかったこと、そこで生じていた苦しみや不安と直接向き合うことなく宙づりにしてしまっているリスクについては、意識的であるべきだろう。そうでなければ、パッシング・ケアは、単に介護者の都合で認知症高齢者をコントロールするために用いられてしまいかねない。利用者との共同による「物語」の文脈形成過程において、介護者は、より慎重な言動と反省的なまなざしを、常に自らに課すことが求められる。これに関連して、（資料3）を確認しておきたい。ここでの介護職員Bの対応もパッシング・ケアの一例と考えてよいだろう。しかしここでBから、たとえば「それがいいとかはわからんけど」といった発言がみられたことや、一時的な対応であることを繰り返し強調しているところなどから、（B本人が意識しているか無意識であるかは不明であるものの、）彼女がパッシング・ケアに潜む危険性を感受していることが読み取れる。

以上確認したパッシング・ケアとは対照的な関わり方として、「事実を事実として提示するケア」が据えられることがある。そこでは認知症高齢者自身が、自身の認知症について文章で表現したり、他者と語り合ったりするなどの取り組みがなされ、注目を集めている<sup>4</sup>。

このことに関連して（資料4）を見てほしい。これは、認知症高齢者とのコミュニケーション場面において、相手を傷つけずにその場をしのぐための“嘘”を用いることについて、介護職員Cから話を伺った際のデータである。ここでCは、「理

想」と「現実」という言葉を用いつつ、「嘘偽りないケア」を理想としながらも、現実には「まんま真っ正直でもできん [= よくない]」としている。

出口らが可能性を見出した「事実を事実として提示するケア」を、西川は“自己開示してもらおうケア”と呼び、批判的な立場から論を展開する。ここでの批判の要点は、認知症高齢者における“自己”と、スタッフによる「補助自我」との関係のあいまいさをめぐるものである。認知症高齢者の“自己開示”について、西川は次のように述べている。

“自己開示してもらおうケア”がいう“自己”とは何をさすのだろうか。スタッフが「補助自我」になるというのは、認知症から距離を取った正常の自我意識を意味してはいないだろうか。(西川 [2007: 112]。傍線は荒木)

ここでの西川の指摘において重要となるのは、出口が肯定的に評価している「事実を事実として提示するケア」（すなわち、西川が言う“自己開示してもらおうケア”）における介護者／被介護者の関係性と、そこから紡ぎだされる「語り／物語」のあり方である。そこでの介護者と被介護者は、体裁としては、当事者（認知症高齢者）が主体となり、スタッフが補助に入る形にはなっている。しかし実際の介入のあり方からは、一定の方向に結論を誘導している印象がぬぐえないものとなっている。より具体的にいうならば、認知症という明確な病気で辛い状況に置かれているという「事実」、あるいは、認知症という病気によって“普通”の状態ではなくなっている「自己」、そのような「事実」「自己」の捉え方が無条件に前提とされているように思われるのである。「正常の自我意識」によって設定された、「(辛い) 事実」や「(普通でない) 自己」という、ある常識的な「理解」の枠組みの正否は結局問われぬまま、認知症高齢者は与えられた方向に考えることを強いられてはいないだろうか。先の「理解」をめぐる考察に関連づけていえば、彼らはそのように「わかれたい」のだろうか？

そこで行われている、物語としての「事実」あるいは「自己」の構築は、形式的には共同で構築されている物語でありながら、実際には介助する側／される側のあいだに存在する非対称性が反映されてしまっている可能性について、ここでは指摘しておきたい。

## 6. 「理解」と「物語」をめぐる

認知症高齢者の「語り」と、そこに込められた「意思」や「思い」が、誤った形で（あるいは、認知症高齢者自身にとって好ましくない形で）「理解」され、関係の文脈が形成されることの危険性について、われわれは十分に意識的である必要がある。なぜならば、まさにこの場面（＝認知症高齢者をめぐる関係の文脈形成過程）においてこそ、介護者と認知症高齢者の双方が主体的に関わり、閉塞したケア実践に豊かな多様性をもたらす、創造的変容の可能性を見出し得るからである。認知症高齢者支援に関わる人々は、（そこにパッシング・ケアが介在するか否かにかかわらず）認知症高齢者を取り巻く〈ケア〉場面での、日常的で取るに足らないやりとり、日々の当たり前の会話（相互作用）を反省的に振り返ることが求められる。この反省的振り返りの作業を通してはじめて、固定化され、余裕を失いがちな認知症高齢者ケア実践の場面に、別様の解釈の可能性をもたらすことが可能になるのではないだろうか<sup>5</sup>。このことに関連して、(資料5)を見ておきたい。介護職員Dは、業務が忙しいさなかに認知症高齢者に声をかけられた際の対応のうち、うまくいった事例について語ってくれた。Dが実践しているのは、会話による物語の共同構築でもなく、認知症という現実に対峙することを強いるような対応でもない。そのいずれでもなく、とりあえず「連れまわす」ことでともにいる〈場〉を形成する、という別様のケアの可能性が、ここでは確かに示唆されている。

認知症高齢者ケア場面において、他者の意思を「理解する」という営みの意義と同時にその有する限界を知り、介護者／被介護者間の根源的な非対称性を超える（あるいは非対称性を抱えつつ

の) 関係の結び結び方を構想していくこと。理解の限界を知り、そのうえでなお快適な〈場〉を共有していく方途を見出していくことが、介護の、あるいはより対象を広くとったケアの現場において求められている。なおそこでは、認知症高齢者とその周囲の関係者とが、(行為としての)「語り」を通して、(形式や構造としての)「物語」を共同構築していくこととなる。その際、最も重要となるのは、「語り／物語」の自由度と多様性を確保し続けることであると考え<sup>6</sup>。そのための方策の検討については、今後の課題としておきたい。

## 注

- <sup>1</sup> 荒木 [2014] [2015] 等参照のこと。
- <sup>2</sup> 「認知症当事者」が抱える思いは、近年さまざまな媒体で発表され始めている。そこで語りの主体となるのは、多くの場合、比較的若年期の認知症患者であるように思われる。本研究においても取り上げる出口らにより、認知症高齢者を対象とした取り組みも進められてはおり(出口 [2006]、高橋 [2006] 等)、年齢や状態等の別による質的・量的両面での「語り方／語られ方」の差異は検討に値するテーマであるが、本研究においては扱わない。
- <sup>3</sup> 出口 [2004]、荒木 [2015] 等参照。
- <sup>4</sup> パッシング・ケアと「事実を事実として提示するケア」という、極端に異なるケアのあり方が併存し、どのようなスタンスでケアに望むかが職員それぞれで異なることで、介護現場においてもある種の混乱状況が発生していることも、これまで指摘してきている。(荒木 [2014] [2015])
- <sup>5</sup> (六車 [2015]) (西川 [2007]) 等参照。
- <sup>6</sup> これに関連して京極は、「子ども」と「認知症高齢者」とを包括的に捉える視点から、〈専門的な接し方〉とは異なる〈素人的な接し方〉の有する可能性について、ゴッフマンの相互行為論を手がかりとして考察している(京極 [2014])。本稿において取り上げることはできなかったが、筆者が構想する今後のケア論の展開を考えると、京極による論考は大変興味深く、示唆に富んだものである。稿を改めて検討を試みたい。

## (参考文献)

- Anderson, H. & Goolishian, H. 1992, The Client is the Expert: A not-knowing approach to therapy. In McNamee, S. & Gergen, K. J. eds. (=1997「クライエントこそ専門家である」野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践』金剛出版)
- 荒木正平 2014 「派生的暴力としての認知症高齢者のカテゴリー化 —介護者の「語り」を手がかりに—」『文化環境研究』7. pp.30-38。

- 2015 「認知症高齢者による「物語」の構築プロセスに関する考察」『長崎女子短期大学紀要』39 pp.45-51。
- 出口泰靖 1999 「「呆けゆく」人びとの「呆けゆくこと」体験における意味世界への接近——相互行為的な「バイオグラフィカル・ワーク」を手がかりに——」『社会福祉学』59. pp.209-225。
- 2004 「『呆け』たら私はどうなるのか？何を思うのか？」山田富秋編『老いと障害の質的社会学——フィールドワークから』世界思想社 pp.155-183。
- Goffman, E, 1963, Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity: Prentice-Hall. (=1970石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房)
- 木下衆 2015 「誰が、認知症患者の人生を知っているのか？」『現代思想』43 (6) pp.192-203。
- 京極重智 2014 「「子ども」と「認知症高齢者」を結びつけるものとしての「パフォーマンス」：介護等体験において生じうる体験を端緒として」『大阪大学教育学年報』19. pp.3-15。
- 六車由実 2012 『驚きの介護民俗学』医学書院。
- 西川勝 2007『ためらいの看護 臨床日誌から』岩波書店。
- 野口裕二 2002 『物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院。
- 奥村隆 1998 『他者という技法——コミュニケーションの社会学』日本評論社。
- 高橋幸男 2006 『輝くいのちを抱きしめて——「小山のおうち」の認知症ケア』日本放送出版協会。

## 〈インタビュー資料等〉

### 〔資料1〕：介護職員へのインタビュー・データから

- インフォーマント：軽費老人ホーム勤務3年目の女性職員A氏
- テーマ：「利用者による火器等の自己管理についてお話を伺った場面」  
(※インタビュアー（筆者＝荒木）は以下Iと表記)

A：（利用者〇〇氏の）家族さんに言って。もうIH使わないでお湯はポットの、電気コンセントのあれを買ってもらったんですよ。で、それ使ってもらって「IH使わないように。」って言って。だからまあ、どこまで自由にさせるかですよ。なるべく目は付いとるところに。予防で。火系も危ないですね。火とか事故とか。

I：大変な、いろいろね。

A：家族さんがそうやって理解があればいいんですけど。△△さん（＝別の利用者）のとこみたいに手すりひとつにしても（家族が）「やー。（設置しなくて）大丈夫です。」とかなったら、もうそこで終わっちゃうから。

### 〔資料2〕：グループホーム参与観察時のフィールド・ノートから

「私はばけてしまった」などの発言とともに、帰宅願望の訴えを繰り返し、ときに「死なるといかん」などの発言もある男性利用者。

お若い頃のことについて、職員がお話を伺う。出征中、戦地で象とふれあった体験についての話になり、徐々に表情は穏やかになり、象のしぐさや上手な扱い方など、色々なエピソードを楽しげに話してくださる。お話が一段落するころには、ご本人もすっかり落ち着き笑顔が見られる。

### 〔資料3〕：介護職員へのインタビュー・データから

- インフォーマント：特養勤務3年目の女性職員B氏
- テーマ：「妄想や見当識障害等のある利用者への対応についてお話を伺った場面」  
(※インタビュアー（筆者＝荒木）は以下Iと表記)

B：（認知症のある利用者さんが、B氏のことを）娘さんって思ったりとか。娘さんの名前ば、なんかそんな感じで話しかけられたら、もう合わせる。

I：口調とかも？

B：うーん、口調？わりと。うーん、ちょっとやわらぐ程度ですけど。トーンはちょっと変えますね。（略）トーン高めに、親しみを込めてる感じ。敬語も、ガッツリ敬語をちょっとやんわり敬語にしたりとか。ちょこちょこふつうに、こう、やわらかい言葉でしゃべったりとか、ソフトな感じ

I：そこは、そのままその方（認知症のある利用者）ももう思い込める感じ？

B：うんうん。ま、それがいいとかはわからんけど。ま、でも否定は私はしてない。なんかもうほんと一時的な事やけんか。その人にとったらていうか。その場はその、たった5分だけ、娘さんになって。

I：うんうんうん。

B：で、いっときしたら普通に、なんも言わなくなったりとか。

I：ああそう、ずっとじゃない？

B：うん、ずっとじゃないから。それがずっとやったらちょっと、多分、あんまり思い込ませとったらあれなんでしょうけど。ずっとっていう人、今のとこおらんけんか。ほんとに認知症の、一時的な妄想、妄想っていうか、感じやけん。一時的には合わせますね、話は。

I：それで、やっぱ落ち着く感じに？

B：うーん。ま、本人が納得たぶんして、くれるとやろうけど。

(資料4)：介護職員へのインタビュー・データから

- インフォーマント：グループホーム勤務の女性職員C氏（介護経験10年以上。50代）。
- テーマ：「コミュニケーション場面における“嘘”について、お話を伺った場面」（※インタビュー（筆者＝荒木）は以下Iと表記）

C：うーん、なんかね、嘘偽りとか何とかやなくて、やっぱ、人一人ひとり一人ひとりにやっぱ、あったケアばせんとでけんめけんね、(略) まんま真っ正直でもできんけんね、  
I：あ、やっぱそれは良くないですか？  
C：うん、良くないち思う。そんならくどくど言うちゅうことになるもんね。正直なことを。(略) 理想はね、ちゃんと嘘言わん方がよかかも知れんけどね、現実はそういうわけにいかんもん。  
I：はいはい。ですよ。  
C：うん。ばってんやっぱその、理想に近づけや、してね、ならんこともなかるばってんね。  
I：やっぱりそれが理想ですか？  
C：うーん  
I：あの、本当のことを言う、  
C：本当のことを言って、嘘偽りないケアをすることが本当やろうけん。  
I：あー、それが本来あるべきだとは思うって感じですか？  
C：うん。それに近づけやんめえっちゃ思うけどね、やっぱ一人一人ね、やっぱ、違うやんね全部。呆け方も。

(資料5)：介護職員へのインタビュー・データから

- インフォーマント：小規模多機能型居宅介護勤務の女性職員D氏（経験10年以上。30代）。
- テーマ：「うまくいったコミュニケーション事例について、お話を伺った場面」（※インタビュー（筆者＝荒木）は以下Iと表記）

I：忙しいときに声かけられたらどういう風に？  
D：忙しいときに声かけられたら一緒にその人を連れてってから、一緒に歩きながらその人も連れまわして。  
I：一緒に（笑）なるほど。  
D：でなんやったっけ？みたいな感じでしたら。「あんた忙しかとやろ。」みたいな感じな時に「いやよかとよ。」って言ったら、「いや後でよかよ。」って向こうがひいてくれたりとか。たら「後からよか？」みたいな。私から「後から。」じゃなくて向こうから「じゃあ後から私の話ば聞いてくれる？」みたいな感じで「いいよ。」って行って、そしたら忘れとったりとか、後から行って「さっき何の話ばしよったっけ？」っていったら「あ～忘れたよ。」って収まったりとか。  
I：Dさんから「後から。」っていうんじゃないで。  
D：そうそう。「じゃあ一緒に行こうよ。」みたいな感じで。(略) こっちから「ちょっと忙しかけん。」みたいにシャットダウンするんじゃないで「よかさ一緒に行ったらいいさ。」みたいな感じ「一緒にじゃあこればしようか。」「手伝ってくれる？」みたいな。掃除ばいっしょに手伝ってもらったりとか。そしたらちょっと落ち着いたたりとか。拭き掃除ばしたりとか。(略)で、手ば繋いでから「私こっちに行くけん、一緒に行く？」っていったら「よかとね？一緒に来て。」「よかさー。」って「何も邪魔しとらんよ。」って「なんてやったっけ？」って話ながら出来る仕事。洗濯物干したりとかやったら出来るじゃないですか？洗濯物干さんばけど、それば話ながら「じゃあ干してる？」みたいに台ば拭きながらしたり。(略) 多分「洗濯物干さんばけんがごめんね。」って言ってしまったら多分その人は消化されんでモヤモヤするとやろうけど、私は逆に連れまわすとですたいね。「こっちにこんね。」みたいに。